

手記

生き抜いて祖国へ

和歌山県 岡本 昇

終戦

精鋭を誇った関東軍のほとんどが、昭和二十年三月から四月にかけて、本土決戦のため、主要兵器と共に九州方面へ移動し、私はその後の新設部隊要員として残留した。当時、満州在住の日本人で四十歳くらいまでの人たちを現地召集し、第二百二十六師団を編成した。部隊といっても兵器の極めて少ない、いわゆる員数をそろえた烏合の衆にひとしい集団であった。それでも何の不安も抱かないまま、日夜訓練に励み、六月下旬には、満州東

部の、遥かにソ連領を望む八面通の山岳に入り、築城演習（主としてたこぼ穴掘）に参加したのである。

八月九日未明、突如聞きなれぬすさまじい飛行機の爆音に眠りを覚まされ、ソ連参戦を知った。「全力を挙げて交戦せよ」の命令で、私たちは演習中のボロ服のまま、山を下り、平陽の原隊で装備を整えるため、移動することになった。

途中、最前線の国境監視隊の悲壮な全滅を知らされ、何くそと一層敵愾心をあおった。しかし平陽の原隊は、すでに敵中に陥ち、兵器、食糧、衣服の補給ができないまま、作戦を変更し、牡丹江まで退いた。敵の進攻を食い止めたいと、牡丹江外の小高い丘に陣取ったが、抵抗する武器もなく、ただかん声を挙げるばかりだった。

双発の飛行機が低空でゆっくり飛び去るのを見て、友

軍機だと手を振ったが、実は敵機が日本軍の集結状況を偵察したもので、しばらくすると、ソ連の攻撃機の編隊が来襲し、すさまじい機銃掃射を浴びせてきた。敵の戦車は悠々と横行し、正確な砲弾は間断なく身辺をおびやかす。身動きできぬ状態で、むなしく戦死者が続出した。

いかに戦意を鼓舞しても、無手勝流では全滅するので、夜に入って退却の命令が出た。敵の執拗な攻撃をくぐって、昼間は高粱畑や山合いにひそみ、夜はひたすら歩き続けた。そして牡丹江とハルピンの間くらいにある横道河子という鉄道の駅にたどり着いたのが、たしか八月十六日の夕刻であった。

駅舎内ではっと一息つく間もなく、超低空の攻撃機の機銃掃射は容赦なく繰り返され、駅舎のトタン屋根を貫いて身辺で不気味な音を立てる。私の隣で腹ばいになっていた兵士が、不意に異様な叫び声をあげた。振り返ってみると、背中から腹へ九ミリの弾丸が貫通し、弾丸の出口が大きく裂けて、内臓がむごたらしく飛び出している。敵弾のすさまじい威力に、戦慄が背すじを走る。

本能的に近くにあったワラ製のカマスを何枚もかぶせ、私もその中にもぐった。爆音の遠ざかるのを待って、カマスを取り除いてみると、すでに口もきけない状態で、抱きあげたときはこと切れていた。くやしきで兵士の顔がかすんでくる。私は今でもその光景をまざまざと思い出すことができる。夕闇にまぎれて駅舎近くに埋葬し、冥福を祈る。明日は我が身と思いながらも、疲れ果てて、そのまま深い眠りに落ちた。

「そのままの服装で集合」という声で駅舎外に出てみると、あれほど頻繁に攻撃してきた爆音が全く途絶えて、静かな朝であった。将校が「本日日本軍は連合軍に対し無条件降伏した」と悲痛な声を残して、足早に立ち去った。皆一様にその場にへたへたと坐りこんでだれも口をきかない。

思えばソ連参戦から今日まで、何一つ抵抗できないまま、追われ追われて逃げまどった屈辱の日々。しかもこの間に幾多の同胞を失った口惜しさが一時にこみあげて、空に向かって大声をあげた。軍人として、降伏という意味がどれほど重大なことか判断できないほど、心身

ともに打ちのめされた状態の中で、我にかえると、自分は生きているという現実がよみがえってきて、お互いにそれを確かめ合った。

これからどうなるのかという不安と、口にくそ出さないが、戦は終わった、祖国に帰れるという感傷が入り乱れて、肩を寄せ合い、動こうとしなかった。

翌々日十九日、ソ連兵による武装解除が行われたが、あまりにも貧弱な日本軍の装備に、ソ連兵も驚いたことと思う。そして心ならずも完全にソ連軍の捕虜となり、隊列を整えて追い立てられながら、牡丹江へ引き返した。途中、敗戦の跡はいたましく黒くはれあがった死体が散乱し、重傷の軍馬があえぎながら横たわっている様を見ても、ただ無心に歩き続けるばかりであった。

牡丹江郊外の壊れた兵器廠が私どもの仮収容所となり、コーリャンとわずかな魚肉の主食も不十分ながら支給され、あの悪夢の敗戦に比べたらむしろ天国で、私たちは帰国を信じ、待機していたのである。事実、各収容所から選抜の兵士が連日内地帰還といって出発し、のどかな明るい生活が続いた。

そして十一月三日、明治節の行事が終わった後で、私もいよいよ帰国の一員となり、喜びを胸に秘めて列車に乗りこんだ。行く手にあの過酷なシベリア抑留という運命が待ち構えているとはつゆ知らず、車内は窮屈ながら、帰国の夢をはらみ、はしゃいだ雰囲気包まれていたが、列車はそれと裏腹に、無情の黒煙を吐きながら、一路シベリアに向かって走り続けていたのである。

抑留（その一）

シベリア送り

輸送車は、有蓋貨車を中程で、上と下に仕切り板を敷いて、それに私たちは辛うじて寝起きできる程度に詰めこんだ。中央部を空間にして、その片隅の床に穴をあけ、それにトタンを丸めて差しこんだ、簡単な便所がある。もちろん窓はなく、昼夜の区別はつくが、どこをどう走っているか全くわからない。車中では帰るという確信がもしかしたらという不安に変わり、次第に無口になっていった。

数日後、列車がとまったとき、はじめて下車することができた。一目でソ連領とわかるたたずまいに、帰国の

夢はすつとんで、シベリア送りだと観念した。途中ハバロフスクという町も通った。バイカル湖畔で下車して、水も飲んだ。下車の度にソ連人が「時計をよこせ」と群がって来た。下車した駅の線路上に並んで、しゃがみ、やけ糞もした。

そして一か月くらいでウオロシコフという町はずれで下車し、凍てついた大地をソ連兵に追い立てられて、二時間近く歩いて、やっと着いた所が魔の収容所だったのである。

収容所で

収容所は板塀で、上部に鉄線をめぐらし、四すみに監視台がある。門をくぐると、すでに先に來ていた同胞が私たちを迎えて、「自分たちは明日帰国する」と言った。十棟ほどの建物は、屋根が地上すれすれで、土を載せている。入口の扉を開くと、二坪ほどのおどろき場、さらに奥の扉を開くと階段になって地下におりる。

中央に通路があり、その両側に二段ずつの板のベッドが並び、隣のベッドの間は、やっと人が上り下りできるくらいで、一段に四人寝るようになっていた。中央の両

側に暖炉があるが、燃やしていない。うす暗い電球が二つある。私は上段のベッドを与えられた。屋根裏との間には中腰になると頭がつかえて窮屈そのものである。

驚いたことに、急造であろうベッドの板も屋根裏も、松の生木で、表面がガリガリに凍りついている。この上で寝れという。冗談じゃあない、氷の上で寝たら凍死する、と文句を言っても通じない。やむを得ず毛布を敷いて外套にくるまったが、とても寝つかれぬ。百人ほどの者がみな通路に立って「えらい所へ連れて來られた」と泣き事を言いながら夜を明かした。

携帯の飯盒は取り上げられた。食事は干大根の千切り、小豆と少量の家畜の内臓の入ったスープがブリキ製のうどん鉢大の容器に七分目、それに酸っぱくてポロポロの黒パン百グラム、これが一食分のすべてで、三食とも同じものであった。

十日ばかりすると、凍っていたベッドも人の温もりで少しずつ乾いて、どうにか眠れるようになった。苦になつたのは朝夕の点呼である。私たちを舎外に出した後、だれも残っていないか点検してから、十人ずつ一列

に並べて、将校がおもむろに端から数える。途中、少しでも隊列が動くと、首を振ってまた元に戻って数え直す。時には何回も繰り返すことがある。長時間動かずに立ちつくすと、寒さで手がしびれて倒れそうになる。私たちは「魔の点呼」と呼んでいた。

そろそろ作業が始まる。初めは軽作業で、しかも毎日ではなかった。さほど苦にはならなかったが、半月ほどで本格的になり、グルーブを編成して定まった作業場に行くようになった。作業場によってはノルマが終わらぬと帰れない所もあり、また時間外労働も強いられた。寒さと栄養不足で体力が衰えてゆくのに反し、労働はさらに厳しいものになって、急速に体力の衰えが目立ってゆく。

作業が終わって暮れ切った道を黙々と帰る。収容所の火の気のない土間で震えながら、後生大事のわずかな食事を、時間をかけてすすむ。夜は着の身着のまま横になるが、寒さと空腹で寝つかれない。入浴しないので雪で顔や手をこする。シラミがやせ細った身体に遠慮なく寄生して発疹ばかり。次第に人間らしさを失ってゆく。

定期に女医の診断があるが、体温は平常、尻にまだ肉がついていると、休ませてくれぬ。神経痛を訴えても、とり合ってくれない。こうして三か月を過ぎるところから栄養失調者が多くなった。上段のベッドからそのまま尻を出して下痢便をする者があっても、下段の者はこれをとがめることができない。こうなると入り口の片隅にあるむしろ囲いの部屋に収容され、何の手当てもなく、そのままにして置かれる。うつろな目は故郷の空を見ているであろうが「米の飯を腹いっぱい食べたい」と力なく言い残して死んでいった。

ソ連兵が死体を虫けらのように全裸にして、入り口のおどろ場に積み重ねて置くと、自然に冷凍化してゆく。三十体くらいになると私たちの出入りに差支える。やむを得ず死体を踏んで通らねばならない。はじめは戸惑ったが、次第に何の抵抗もなくなってきた。死体は馬車に積んで、どこかへ持ち去り、どうなったかわからない。お互いに生死をともにした同胞の死体を踏むとは、許せないこととのそしりは免れないが、当時の生地獄にもひときい状況の中では、人間の倫理など顧みることのでき

ないほど、極限の状態であつたと言ふことができる。

抑留（その二）

寒さとの闘い

シベリアの冬は長く、真冬になると明るい時間はせいぜい七時間くらいである。朝零下二十五度以下であれば作業中止し、気温の上がるのを待つて作業に出る。零下二十五度くらいになると空気が死んでゐる。煙突の煙は真直に静かに昇つてゆく。戸外に出ると、吐く息で口髭は凍る。目を閉じていると臉が凍りつく。鼻の頭はヒリヒリと痛い。常に身体を動かさないと耐えられぬ。手袋は親指と他の四本をまとめてさす綿入れの大きなもの、それでも手袋の中では常に手を動かす。

靴は底から膝かぶまでの厚いフェルトの縫目のない長靴である。雪の上でも平気で割合温かい。ただ一度濡らすと大変だ。そのまま履いていると足や靴下の湿気で靴と一緒に足が凍りつく。こうなると感覚のない足の指を少しずつ自分の力で辛抱強く動かし、さらに靴の上から気長にマッサージを続けると、感覚が戻ってきて、激しい疼痛が襲ってくる。これを気力で耐えると、靴を脱ぐ

ことができる。凍りついたまま火で温めると、完全に凍傷になって、指の先から腐つてきて、場合によっては足首から切断しないと命にかかわる。

空気が乾燥しているので、体感温度は手足ほどではない。身体を動かしておれば凌ぐことができる。作業の監督は民間人で、仕事をさぼると目の前に顔をつけて怒鳴るが、体罰は絶対にしない。私は体力の消耗を防ぐため、徹底的に仕事をさぼって目をつけられたが、冬の屋外作業は動かずにいられないので、仕事を二の次によく歩き回った。監督が習い覚えた日本語で「コラ、アッチニウロウロ、コッチニウロウロ」と耳元でかみつくようによく怒鳴った。私たちは軍隊で寒さに幾分なれていたの耐えられたが、内地からすぐシベリアに放り出されたら、おそらくみんな凍死しただろうと思う。

入浴

半年くらいたったある休日に「入浴だ」ということで、監視兵の銃剣にせき立てられて、広い通りを足早に一時間ほど歩いて、大きな煙突に白い煙が立つ浴場へ行った。抑留後初めての入浴で、ゆっくりと半年分の垢

が落とせると期待していた。すっ裸になって着衣全部をまとめて自分のものに印をつけ、滅菌室に運ぶ。脱衣場はまだ冷気があり寒い。お互いに相手の裸をもの珍しうに見つめ合う。顔や髭はボサボサで、目ばかりキョロキョロと光り、手足は極端に細い。全身が麻疹と垢で編蛇のようだ。寒いのでこどおりする様は、あたかも斑点のあるやせ蛙の群舞にひとしい。

浴場に入ると湯舟が見当たらぬ。ブリキの容器に二リットルくらいの湯が配られて、これで洗えという。期待はずれでがっかりしたが、結局その湯にタオルをひたして、頭から身体全体をこすった。手の届かぬところはお互いに助け合う。垢がヨレヨレになって限りなく出てくる。丹念にこすると、やっと人肌らしくなった。我ながらよく生きていられると、自分の身体をいとはしくなで回す。三十分ほどで浴室を追い出される。

脱衣場にはまだ衣服が来ていない。裸のままで一かたまりになって、弱々しくおしくらまんじゅうをして、寒さに耐える。衣服は滅菌して、シラミは退治できたが、洗濯してないので、ゴム合羽を素肌に着るようだっ

た。

その後は時々入浴ができた。そのときは安全剃刀を貸してくれ、髪や髭を適当に剃った。股間の男根の周りや脇の下まで剃らされた。剃った後は女医が検査し、十分だと剃り直させられて、検査に合格すると、五十センチほどの棒の先に脱脂綿をつけ、それをヨードチンキらしい液体にひたして、剃りあとに塗ってくれる。少しみたが、さわやかな気分だった。

牛き抜くために

千人根と小豆のスープにも五か月くらいでおさらばして、そのころから糲まじりの米や小麦粉の入った、ややポリリュームのあるスープを与えられるようになった。糲は捨てたらもったいないと、よくかんで飲みこむ。出てきた便は牛馬同様のときもあった。

暖かくなると収容所の庭や屋根の上に青い芽が出る。

手当たり次第にむしって食べる。家畜の糞まじりのゴミ捨場に生えたくさびら（きのこの類）も、縦に引き裂けるものはそのまま口にする。家畜の屠り場で作業中、すきを見て生肉をちぎって食う。生肉を靴底に入れてその

まま履きこむと、出口の身体検査も無事通過し、帰ってから足の匂いや汚れも気にせず、分け合って生のままむさぼり食った。大豆や人参、馬鈴薯の生は天下一品の味がした。おかげで胃腸は原始人並みとなり、腹痛や中毒で死んだ者もない。こうして体力を維持し、栄養失調を克服したのである。

抑留（その三）

作業日誌（レンガ工場で）

あるレンガ工場での出来事である。二階で大きなミキサーが土をこねている。このミキサーからレンガ大の矩形のパイプを通して粘土を階下へ連続して送ってくる。出口に固定した細い鉄線の押切りがあり、女子工員がこれを使って手際よく二個ずつ切ってゆく。他の女子工員がこれを手で取って型くずれしないように四段の木枠のついたトロッコに八十個ずつ積み込む。このトロッコを押して乾燥場に運ぶのが私たちの仕事である。

幾棟かの細長い建物を通してゆくので、かなりの距離があり、途中駆け足しないと順調に運べない。私は監視の目の届かない建物の中で、ままよとばかり、悠々と歩

いていた。どこかで見ていたのか、監督がわめきながら走って来て、私の背中をどんと押した。とっさに私は「やられた」と叫び、その場へぶっ倒れた。（もちろん芝居である）監督さん、びっくりして見ていたが、一目散に走って行き、監視兵と通訳（同僚）を連れて戻ってきた。私は顔をしかめて「なぐられて倒れ、立てない」と言い、通訳には、芝居だ、よろしくとつけ加えた。監督さんはなぐっていないと大きなゼスチュアで必死に説明していたが、後のトロッコがつかえてきたので、話し合いがついて、ぶつぶつ言いながらトロッコを押して駆けて行った。

通訳は私に「うまくいった、今日一日はここから出ないように休め」と言って監督兵を連れて去った。結局監督さんは私の代わりに一日トロッコを押して、私たちはしめし合わせて要領よく交替して休むことができた。監督兵が時折見回りに来たが、何も言はず立ち去ったという。私は後で通訳に、監督とどんな話をしたのかと聞いてみたら、日本人は疲れきっているの、少し押しても倒れる、一日休んだら歩けるようになると言ったら納得

したという。収容所に帰ってこの話が伝わり、久しぶりに明るい笑い声が出て、俺も今度はこの手でゆこうという者もいた。

作業日誌（夜間作業）

仕事の疲れでぐったりと寝ていたら、不意に「作業だ」とたたき起こされる。工場の引込線に入った貨車に積んだ鉄板をおろす作業である。鉄板の表面は凍りついて、にぶい外燈にキラキラ光っている。手を差し出すのもためらう。全部おろしてから帰るという。十人で力を合わせてやっと一枚持ち上げ、肩の高さの貨車のボディーを越させて投げる。足許はすべるし、身を切る冷気は手足の感覚を奪ってゆく。それでも気を抜くと大怪我をするので、泣き声で「セーノ」と掛け声合わせて放り出す。落ちた鉄板の金属音が腸をえぐる。線路脇に整理し終わるまで、かれこれ三時間、我に返ると疲れがどっと出て、凍りついた星空を仰ぐと無性に悲しくなった。収容所に帰っても夜食はなく、空腹で眠れない。それでも翌朝は定時に作業に狩り出される。冬の夜間作業は殊更骨身にこたえる辛い仕事であった。

作業日誌（セメントの積み替え）

有蓋貨車に半分くらいバラのセメントが積んであり、これをトラックに積み替える作業に狩り出された。トラックが数台待ち受けている。貨車の扉を少し開けて、交替で角スコを使ってトラックに積む。最初のうちはうまくいったが、入り口のセメントが少なくなると、十人とも貨車内に追いこまれて、中の者は奥から入口めがけてスコップでセメントを放り出す。角スコでは思うようにはすくえない。

次第に足許が埋まって身動きできなくなる。それにもまして車内はもうもうとして、目をあけておれない。口や鼻は硬ばってくる。入口では監督が口やかましく、早くやれと怒鳴るので、息も絶え絶え、無茶苦茶にスコップを振り回す。息が詰まる。入り口と中と交替する。全身真白で、「殺される」という口の動きがようやくわかる程度だ。終わって目や鼻、口を洗うのに一苦労したが、いつまでもばりばりしていた。どうしてこんな無茶な作業ができたのか、不思議に思うし、今再現することは不可能だと思う。

作業日誌（草刈り）

二年目の夏、私も四十人ほど、収容所を出て、泊りこみで、外蒙に近い農場へ働きに行くことになった。シベリアの夏は、朝四時ごろ夜が明けて、夕暮れは午後十二時近くで、日中は暑い。ソ連の農夫が機械を馬にひかせて草を刈る。それを集めて積むのが私たちの仕事だが、一山のかさと幾山という一口のノルマがある。

暑いので怠けて、できるだけそっと積んで、格好だけつけて休んでいると、監督が回って来て、馬上から勢いよくその草山の上に飛び降りる。たちまちベシヤンコになる。さらに憎らしく全体を踏みつけて、両手で山の大きさを示しながら、このとおりに積みと急ぎ立てる。見ている間は仕方ないので、その通りやると、やがて安心して行ってしまう。私たちは踏みつけた草をまた元通りにそっと積み直す。監督兵はこのいちごっこを笑って見ていた。時間が来たら引き揚げた。

農場には見るからに健康そうな乙女がいて、彼女たちと片言まじりや手真似でよく話をした。「日本へ行かないか、日本の女は化粧して、家で食事の支度をして、主

人を待ってあればよい」と話しかけても「そんなことはない、うそにきまっている」と取り合はない。働かずに食べられるはずがないと信じている。深夜作業に行く途中でも、仕事服の女性がスクラムを組んで労働歌を合唱しながら、嬉々として闊歩している姿をよく見かけた。彼女たちには働くことが無上の幸せであり、喜びである。この国の教育が半端なものではないと知らされた。

帰国

三度厳しい冬が訪れようとする昭和二十二年十月初めのある日、作業時間になっても呼び出しがない。不審に思っていると、やがて全員舎外に出されて隊列を組み、収容所の庭をぐるぐる何回も歩かされた。何のこともさっぱりわからない。身体検査があつて、特に爪の長い者は切られ、衣服や靴の破れをつくらえという。日本新聞（収容所内の共産思想をPRするもの）を余分に配ってくれる。いよいよ帰れるか、いや、別の所へ移動など憶測しながら、わけのわからぬ毎日が続いた。十月半ば、いつものように整列すると、収容所長が、「ダバイダモイ」（さあ帰る）と門を開けてくれた。

帰れるという保証はない。幾多の同胞が無惨な死を遂げた収容所だが「二度と来るもんか」と別れを告げた。入所時と同じような貨車に乗せられたが、列車は確実に東に向かって進んでいる。私たちの不安は少しずつ薄れて、帰るという期待に変わっていった。途中ウラジオストクに下車して、丘から軍港を眺めることができた。ソ連の威容を私たちに誇示したものだと思う。そして十一月半ばすぎに待望のナホトカに到着したのである。

ここではソ連共産主義を誹謗する者は反動分子として日本へ帰さないというので、みな神妙に「スターリンハラシヨ」と片手を挙げて合唱した。十二月一日と思うが、港に日本の貨物船が入ってきた。船腹に山澄丸という字がはっきりと読みとれた。船上には男にまじって二人の白衣の日本女性が手を振っている。うれしさが歓声となって広がってゆく。船腹のはしごを一気にかけて上がると、いきなり白い粉を吹きかけられた。DDTという殺虫剤だという。船員に帰国を確かめると、もう船内は興奮のるつぼとなり、收拾がつかない。

船は静かに動き出す。遠ざかる山々を見つめて、この

日を待ち焦がれながらも、いたましく異国に眠った同胞に思いを馳せ、万感の恨みを抱いてシベリアに別れを告げたのである。

十二月三日、夕映の舞鶴港に船は静かにすべりこんだ。夢に見た祖国が手の届く所にある。ワラ屋根の民家と取り残された真赤な柿が二つ三つ、大粒の涙を拭おうともしせずじっと見つめた。私の脳裏にはこの光景が強烈に焼きついて今でもよく夢に出てくる。

翌日、検疫を済ませ、長い板の栈橋を我先にと駆け抜けて、祖国への第一歩を躍り上がって踏みしめた。宿舎に入り、家へ「帰った」と電報を打つとき、初めて両親の顔が浮かんだ。土地の人が終戦前後の内地もひどいものだったと話してくれた。大きな湯舟にひたり、子供のよう湯をかけ合う。さっぱりとした湯上がりに、祖国の夜を満喫したのである。

大枚三百円を支給されて驚く。しかし売店の小さい煎餅が十円ということで、どうなっているのかと戸惑った。

八日早朝、舞鶴から郵便貨車に便乗し、故郷に向か

う。途中空襲のすごさを物語る焼跡を目のあたりにする。一見引揚者とわかる異様な服装をした私を見ても、ねぎらいの言葉をかけてくれない。みな同じような目に遭って人どころではなかったのであらう。

木炭バスに揺られて故郷に降りたつたのは夕方であった。帰る日時を知らせてないので、だれも迎えに来ていない。家までの細道を飛んできたり、ただいまと戸を開けたら、親父が不思議そうに見つめて、「お前、達者なのか」と言った。後で聞いたことだが、今までシベリアからの引揚者はだれでも病人で、中には戸板を持って迎えにいった人もあって、私の簡単な電報で、帰って来るのはよいが、重病人に違いない、途中まで医者連れて迎えに行かんらんと相談していたという。元気な私を見て親父がげげんな顔をしたなぞがとけたのである。

積もる話を交わすうちに、みんなが一樣に長い苦しい戦いから敗戦の憂き目に遭い、そのどん底からはい上がって、祖国の再建に挑んでいる心意気が頼もしく伝わってきて、私も生き抜いて帰れてほんとうによかったという実感をしみじみとかみしめたのである。

私の抑留体験記

新潟県 駒形 正作

朝鮮の茂山付近で終戦を迎え、八月二十日ころ、富寧に收容された。收容所には羅南大隊が收容されていた。カーバイト工場の寮らしい。終戦直後と場所が朝鮮の関係、警備が非常に厳しく、周りは鉄柵が高く張りめぐられ、一定の間隔で高い見張り台、自動小銃を持った歩哨が昼夜の見張り、最初は逃亡者が出たため、見せしめの銃殺、うっかり柵に近寄り射殺される悲惨な事故も起きた。

糧秣が非常に不安定で、遅延で三日間絶食、炊事は各班ごとの飯盒炊さん、糧秣分配は本部、中隊、班と、回数を重ねるたびに減量、一食一杯のかゆも、米粒が数えられる。一週間の食糧を一食で食べて満腹を感じる程度。糧秣は粳、玄米、大豆ばかり二十日以上、小豆ばかり二十日以上も続き、寝ているのが精いっぱい。起き上